

藤原宮下層運河出土木製品



藤原宮中心部の下層には、幅6～9m、深さ2mほどの大規模な南北溝が貫流しています。藤原宮の下層にあるため部分的な調査に留まりますが、これまでに朝堂院朝庭から北面中門付近まで570mにわたって確認されています。この南北溝は、発掘成果や『万葉集』に収録された近江の田上山から切り出した檜を筏に組み、藤原宮まで運ぶ歌などから、宮の造営に関わる資材を運搬した運河と考えられてきました。2015年度におこなった大極殿院内庭の調査(飛鳥藤原第186次調査)でもその一部を掘り下げ、最下層に堆積する粗砂層を中心に土器や動物骨、木質遺物など大量の遺物が出土しました。

木質遺物の中には、農具(鋤)や斎串、横櫛や付札といった用途のわかる製品もありますが、多くは



(右上の鋤の長さ18.4cm。黒塗りはヒノキ製品)

製品の加工に伴って生じた残材や雑木の類です。樹種同定をおこなったところ、木製品や残材にはかなりの比率でヒノキが用いられているのに対し、人為的な加工がほとんどみられない雑木には1点も確認されない、という興味深い事実が明らかとなりました。周辺植生を反映しているとみられる花粉分析の結果もふまえると、藤原宮周辺で大量のヒノキを調達することは難しかったとみてよさそうです。

分析できたのは木質遺物全体のごく一部に留まりますが、製品だけでなく雑木などについても樹種同定をおこない、周辺植生を復元することで、藤原宮から出土するヒノキ材が運河を通じて遠隔地から運ばれてきたことが、出土遺物からも裏づけられつつあります。

(都城発掘調査部 諫早 直人)